

筋ジストロフィー症患者の精神医学 的観察と生活歴に関する研究

愛媛大学医学部

柿本 泰男 佐藤 勝
井上 良一 三宅 正治

筋ジストロフィー患者では屢々治療意欲を失ない、生活は依存的で、さらには対人接触を断ち無為、無欲な状態に陥る。時にはひねくれ、乱暴、情動不安定、幻覚妄想を示すに至る。これは幼時にはじまる運動機能の喪失、疾患の慢性的進行、行動範囲の制限、生命の危機に対する退行的な防禦とも考えられる。しかしこの解決は具体的な事実の裏付けがなく、したがって治療的な手だてを得ることができない。われわれは昨年度（51年度）の研究において、在宅の患者15名とその親に面接して、無意欲で対人接触不良を示す患者の母親には、患児に対して理知的に接触し身体的、感情的接触が乏しい者の多い事を認めた。すなわち、これらの母親は患児をかかえた経済的困難性もあってか、自ら職業についたり、あるいは自らの人生の価値を、患児の看護にかけるよりも、職業あるいは他児の養育に求めている傾向が大きかった。

本年度はさらに数名の在宅患者に接触し、前年度の結果を確認した。本年度はこれよりも、さらに重点を置いた事は、もし患児と両親との情緒的な交流が患児の精神発育を支えるのに重要とすれば、施設への入所児には、この問題はより明確化されると考えて、入所児についての観察を行った。

徳島療養所に入所している筋ジストロフィー症の Duchenne 型の患者40名を選んで、医師が面接を行ない、表情、接触性、言語的な交流、行動観察を行ない、症状の Rafing を行なった。

一方看護日誌の患者の日常生活の観察記録から、治療意欲、勉学意欲、趣味の広さ、交友、集団活動の能力、問題行動、情緒の安定性などについて症状を抽出し、同じく Rafing を行なった。これと運動障害の程度、年齢、入所時年齢、両親の面会回数、外泊回数などの相関をしらべた。

そこで第1に明らかになった事は、入所時の年齢が若い程、精神障害の程度が強いことである。Rafing Score の低いものは、医師による評価、看護日誌の記録からの評価いづれをとっても、9才以前に入所しているものの約半数に見られた。一方10才以後に入所しているものの90%は高い Score を示した。このことは、精神発達、特に情緒の発育において、このような疾患を負う患者では両親、特に母親との接触が特に重要な意味をもつと考えさせる。

第2に年齢が高くなるにつれて Score が高い傾向が見られたが、高年齢の患児は入所時年齢も高く、その因子も考慮する必要があり、年齢が高くなるにつれて、精神的に立直ると結論することはできない。

第3に面会回数が多い患者では少ない患者よりも Score は高い傾向がみられた。

以上のことを治療的観点から考えると、患者の精神発育、すなわち安定した情動、コミュニケーションの拡大、生活意欲の維持のためには、1) 母親との情緒的交流が密接に保たれている必要があり、母親の甘やかし、受容、共感的態度が必要であり、理性的な態度は望ましくないこと
2) 施設への入所は10才に至るまでは望ましくないことが云えよう。これが中間的結論であるが今後更に症例を増し検討が必要であろう。

さらに生化学的立場から筋蛋白の代謝動態に関する研究も行なったが、予備的段階であり、来年度の研究テーマとして追加したい。

30 PMD high stage 者の主体的 集団活動における側面的援助の一考察

国立療養所医王病院

正 木 不二磨

〔はじめに〕

行動する事と、その結果の受容、即ち経験における二面的結合が、療育の場において、ともすれば軽んじられやすい、ことに high stage 者においては、後者のみ重視され、身体的活動と精神的活動を機械的に分離し、後者に訴える傾向がある。しかし、我々は、成す事によって学ぶ、即ち集団活動を展開させる事によって自ずから、受容場面においても、その差が理解、知識、思考の深さとなって異なってきた、主体的関与度とも関連してくるものと思われ、S50年度の班会議にて、「器楽訓練による意識の変容について」と題し、後者の必要性についての考察を行なった。今年、5年を経た今日の high stage 者について、考察を行なう。

〔研究の目的〕

趣味の狭少に加え、進行に伴なう障壁の累積は、各人がその過程において内在しており、加えて集団活動場面において high stage 者は、援助なくしてそのギャップを埋める事ができず、主体的関与度とも関連する。長期展望に立脚し、たとえ Bed patient に至っても、主体的に関与可能であろうと推察される集団活動の援助をとうして（能力減損が、即障害とならない為の）今一度、PMDの療育について考えてみたい。

〔実践過程の概略〕

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

筋ジストロフィー患者では、治療意欲を対人接触を断ち無為、無欲な状態に陥る。時にはひねくれ、乱暴、情動不安定、幻覚妄想を示すに至る。これは幼時にはじまる運動機能の喪失、疾患の慢性的進行、行動範囲の制限、生命の危機に対する退行的な防禦とも考えられる。しかしこの解決は具体的な事実の裏付けがなく、したがって治療的な手だてを得ることができない。われわれは昨年度(51年度)の研究において、在宅の患者15名とその親に面接して、無意欲で対人接触不良を示す患者の母親には、患児に対して理知的に接触し身体的、感情的接触が乏しい者の多い事を認めた。